



営農情報

第110号 令和3年8月4日

「あまおう」8月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

現在の生育状況

(1) 子苗の生育

さしポットでの鉢上げ及びすけポットでの切り離しは例年より7～10日早く、葉かぎは7月上旬から開始されました。しかし、6月初めの温度が低い時期に鉢上げされた株は活着に時間を要しました。また、降水量が少ないこともあり、鉢土が乾燥した影響による葉害も見られました。

鉢上げ後、降雨が少なく、日照時間が多い(図2)ことから、根傷みが少なく、順調に生育しているところが多くなっています。しかし、一部、水持ちがよいポット培土を使用しているところでは、根傷みが見られます。

(2) 病害虫

うどんこ病の発生が6月中旬まで見られましたが、その後は、防除により発病が抑えられています。

炭疽病の発病は、7月中旬から拡大し、一部では多発している生産者もあります。この原因としては、2月下旬の気温が高かったため、早くから炭疽病菌が活動し、専用親株で増殖し、梅雨明けと同時に育苗床で感染が拡大したものと考えられます。

チビクロバネキノコバエは昨年より少ないものの、専用親株から発生が見られ、子苗に被害を及ぼしました。

カキノヒメヨコバイの発生は、7月上旬まで続きましたが、その後、減少しました。

【気象の経過】 (図1、図2)

5月15日に梅雨入りし(平年より20日早い)、7月13日に梅雨明けしました(平年より6日早い)。6～7月の気温は平年より高く推移し、降水量は平年より少なくなっています。

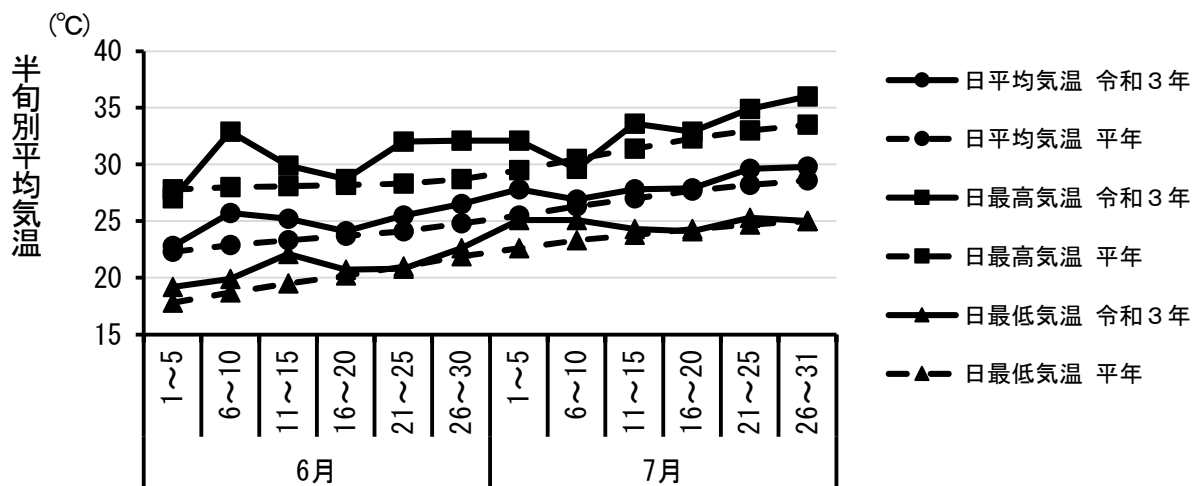


図1 6～7月の気温の推移

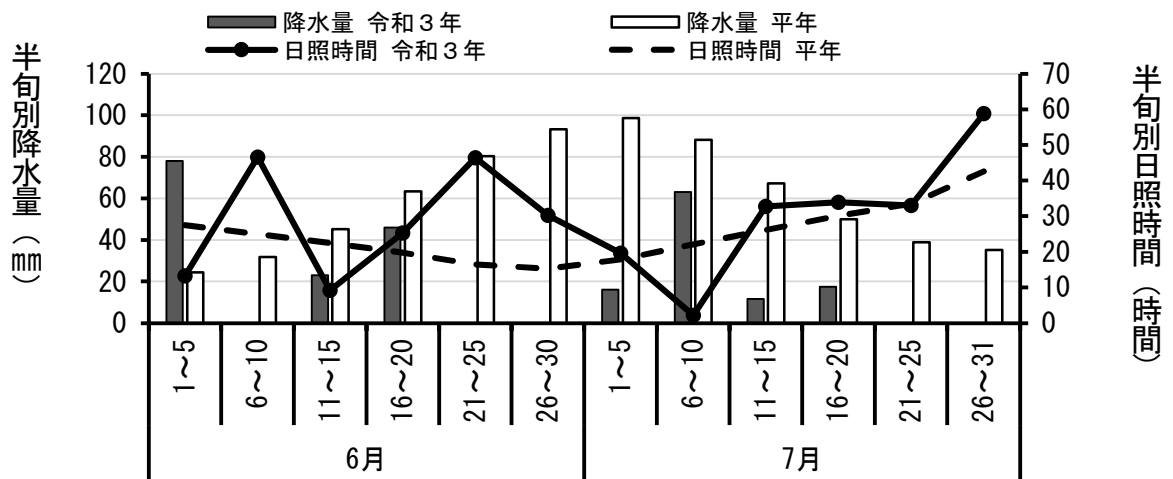


図2 6～7月の半旬別降水量及び日照時間の推移

【今後の気象予報及び生育の見込み】

[1か月予報]

九州北部地方では、期間のはじめは降水量がかなり少ない状態が続き、向こう1か月の気温は、ほぼ平年並の見込みです。

(7月29日 福岡管区气象台発表)

1か月の平均気温・降水量・日照時間

| 平均気温 (1か月) | 降水量 (1か月) | 日照時間 (1か月) |
|---------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 低30 並30 高40% ほぼ平年並の見込み | 少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み | 少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み |

週別の天候・平均気温

| | (1週目) 7/31~8/6 | (2週目) 8/7~13 | (3~4週目) 8/14~27 |
|------|-------------------------|---------------------------|-----------------------|
| 天候 | 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。 | 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。 | 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。 |
| 平均気温 | 低40 並50 高10% 平年並の見込み | 低20 並40 高40% 平年並か高い見込み | 低20 並30 高50% 高い見込み |

[生育の見込み]

8月後半の気温が高いことから普通ポットの花芽分化遅延が懸念されます。また、夏季が高温で推移するので、炭疽病が拡大するおそれがあります。

8月の管理目標

- 子苗が肥料切れしないように管理し、クラウン径 10～12mm の大苗を育成する
- 育苗期後半には、イチゴの体内窒素をコントロールするとともに株冷施設や夜冷施設の温度を適切に管理し、目標とする時期に花芽を分化させる
- 定期的な薬剤散布により、炭疽病や疫病の発生を防ぎ、健全苗を育成する
- 本田の土壌消毒や土づくりを行い、8月上旬までに定植床の準備を完了する

育苗管理

【 作型 】

表1 「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

| 作型 | 入庫 | 出庫 | 定植予定日 | 陽光処理 | 収穫開始 |
|------------------|-------|-------|----------|------|---------|
| 株冷Ⅲ型 | 8月20日 | 9月12日 | 9月12日～ | 3回 | 11月上旬 |
| 株冷Ⅳ型 | 8月27日 | 9月15日 | 9月15日～ | 2回 | 11月中旬 |
| 株冷Ⅴ型 | 9月1日 | 9月19日 | 9月19日～ | 1回 | 11月下旬 |
| 夜冷Ⅲ型 | 8月18日 | 9月10日 | 9月10～14日 | | 11月上～中旬 |
| 夜冷Ⅳ型 | 8月23日 | 9月15日 | 9月15～18日 | | 11月中旬 |
| 普通ポット | | | 9月20～25日 | | 12月上～中旬 |
| 普通晩期（厳寒期安定出荷を目的） | | | 9月26～28日 | | 12月下旬 |

- クラウン径が10mm未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。

【 施肥 】

- 作型に応じて最終追肥時期（表2）を決め、計画的に施肥を行う。
- ポットが小型なほど、液肥の濃度をうすく、施肥間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。
- 根傷みしている場合は追肥を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。

表2 液肥の最終追肥時期の目安

| 作 型 | 3.5寸鉢 | 3寸鉢 |
|-------------------|--------|-------|
| 株冷Ⅲ型（8月20日入庫） | 8月1日 | 8月5日 |
| 株冷Ⅳ型（8月27日入庫） | 8月5日 | 8月10日 |
| 株冷Ⅴ型（9月1日入庫） | 8月10日 | 8月15日 |
| 夜冷Ⅲ、Ⅳ型（8月中下旬処理開始） | 処理10日前 | 処理5日前 |
| 普通ポット | 8月25日 | 8月30日 |

【 かん水 】

- 少量多回数のかん水を心掛け（晴天日は1日に3～4回程度）、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。
- 8月は高温乾燥傾向が続くと予想されているので、鉢土の水分状況を観察し、苗が萎れないように注意する。

【 葉かぎ 】

- 花芽分化のために、低温処理開始前に葉が4枚必要である。
- 作型に応じて、最終葉かぎを行う（表3）。
- 1回当たりの摘除葉数は2枚以内とし、葉かぎ後は3.5枚程度となるようにする。
- 葉かぎ作業直後は、「炭疽病」の予防散布を必ず行う（傷口からの感染防止）。

表3 最終葉かぎ時期の目安と葉数

| 作型 | 最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数 |
|-------|-------------------|
| 株冷 | 入庫 10 日前に3～3.5枚 |
| 夜冷 | 処理開始 10 日前に3～3.5枚 |
| 普通ポット | 8月25日に3～3.5枚 |

【 寒冷紗被覆 】

- 子苗を寒冷紗で被覆し、昼間の苗の温度を下げ、花芽分化をしやすくする（表4）。

表4 各作型における寒冷紗被覆時期

| 作型 | 被覆する時期 |
|-------|----------------------------|
| 株冷 | 株冷入庫 5～7日前 |
| 夜冷 | 処理期間中（ただし、日中35℃以上の高温になる場合） |
| 普通ポット | 8月下旬から |

【 低温処理 】

- うどんこ病・炭疽病の罹病株及びハダニ類が発生している株は冷蔵庫や夜冷库に入庫しない。

○ 株冷処理

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、クラウン径10mm以上の充実した苗を使用する。
- 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が25～50ppmになるよう、肥培管理を行う。（表5）
- 株冷開始後2～3日間は10℃で管理し、その後、出庫まで15～16℃で管理する。（図3）。
- 冷蔵庫内の湿度が90%以上になるように湿度管理に注意する。
- 冷風が直接当たる部分は乾きやすいため、ダンボールや厚紙で風よけをする。

表5 株冷入庫10日前の体内窒素濃度による管理

| 体内窒素濃度 | 対策 |
|------------|----------------------------------------------------|
| 25ppm 以下 | 葉面散布2回（OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など） |
| 25～100ppm | 葉面散布1回（OKF-1 1000倍、メリット青 500倍など） |
| 100～250ppm | かん水のみ |
| 250～500ppm | PK剤の葉面散布1～2回 入庫2～3日前の試験紙判定で100ppm以下になっているか再調査する |
| 500ppm 以上 | 遅い作型に変更する |

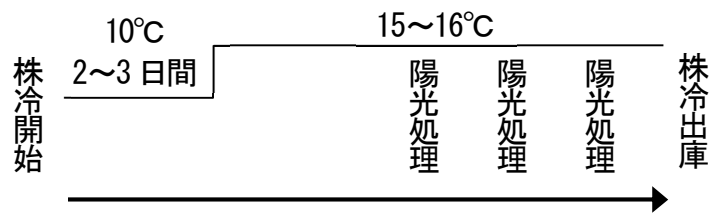


図3 株冷入庫期間の温度管理

● 陽光処理

- ① 株の消耗を抑えるため、晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。入庫 10 日前後に 1 回目を行い、その後 2～3 日間隔で計 3 回程度行う。
- ② 出庫時間は 1 日 8 時間以内とし、乾燥しないようにかん水を行い、株の温度が下がった夕方（午後 6 時頃）再入庫する。（冷蔵庫内の温度上昇・蒸れを防ぐため）

○ 夜冷処理

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時は 150ppm 程度の体内窒素を確保する。
- 入庫時の庫内温度は 13°C ± 2°C とする。
- 入出庫時間の目安は、午前 10 時に出庫、午後 6 時に入庫とする。
- 気温が高い場合、入庫時刻が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。（8 時間日長を基本とするが、10 時間以下であれば問題は生じていない）
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。

病虫害防除

- 本田にハダニ類、うどんこ病、炭疽病を持ち込まないために、早期作型では低温処理直前（最終葉かぎ後）の防除を徹底する。
- 薬剤散布は早朝、もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時やポット土が乾燥しているときには薬害が発生しやすい）。夕方でも葉温が高い場合には、事前に葉水程度の少量散水を行い、葉温を下げた後から薬剤を散布する。
- 病害は予防散布、害虫は初発での防除を心掛ける。

【炭疽病】

- 1 週間間隔での定期的な予防散布及び降雨前後の防除及び葉かぎ後の薬剤散布により防除を徹底する。
- 常に育苗床をよく観察し、発病株と周辺の株は、ほ場外へ持ち出し処分する（発病株を中心に 1 m 範囲）。葉かぎやまとまった降雨の後には必ず薬剤防除を行う。
- 台風前後には、必ず薬剤防除を行う。

【 疫病 】

- 疫病は、土壌伝染と水媒伝染し、発病株に形成された遊走子のうから放出される遊走子により伝染する。
- 梅雨時期～9月の高温多雨期に降雨やかん水により感染が広がる。定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かき後の防除を徹底する。(かん注剤の効果が高い)
- 発病株と周辺の株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 土壌伝染性の病害であり、前年発病したほ場では、再発の恐れがある。前年度発生した本田では、必ず土壌消毒を行う。

【 萎黄病 】

- 育苗期によく観察し、発病株及び疑わしい株が見られた場合は、ほ場外に持ち出し、処分する。
- 前年に萎黄病が発生した本田は必ず土壌消毒を行う。
- 育苗期に萎黄病が発生した場合は、親株を更新する。また、使用したポットや育苗トレー等は丁寧に水洗いした後ケミクロンGで消毒する。

【 ハダニ類 】

- 葉裏に薬液が付着するよう十分量 (60～100 リットル/6000 株) を散布する。
※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、天敵に長期間影響する農薬の使用を避ける。

【 チビクロバネキノコバエ 】

- 成虫は有機物に誘引されるため、ハウス周辺に長期間堆肥を堆積すると、本虫が誘引、産卵して増殖し、発生源となる。
- 堆肥を堆積する場合は、ビニルをベタ張りする等して、本虫が産卵できないようにする。
- 育苗期から薬剤防除を実施する。

【 コガネムシ類 】

- 成虫は5～9月に発生する。幼虫は8～9月に根を食害するようになり、生育不良、枯死などの被害を与える。
- 防除適期は成虫発生期～幼虫発生期の7～9月、下表の薬剤で防除する。

ダイアジノンSLゾル

| 適用害虫名 | 希釈倍数 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 散布液量 |
|----------|-------|----------|--------|------|--------------|
| コガネムシ類幼虫 | 500 倍 | 育苗ポットかん注 | ポット育苗時 | 1 回 | 1000 L/10a * |

* 1ポット当たり 110～140mL (10a 当たり 7,000～9,000 ポットの場合) に相当する。

【 ハスモンヨトウ 】

- 育苗後半から発生が見られるので、トピックスを参考として防除する。

本田準備

例年、8月中旬以降には雨が降る日が多くなるため、8月上旬までに定植床の準備が終わるように早めに準備する。

【 畝立て 】

- 畝は、根が張るスペースを確保し排水性を高めるため、高さ 20～25cm 程度が望ましい。
- 耕うん時、ロータリーの爪に土が付かない程度の土壌水分状態で耕うんする。
- 畝立て後はビニルのべた掛けを行う。

台風対策

【 事前対策 】

- ビニルや寒冷紗で被覆している育苗床は、ビニルや寒冷紗をを取り外し倒壊を防ぐ。
- 施設周囲の作溝により、施設内への雨水の浸入を防ぐ。
- 育苗床周囲の飛散物を撤去する。
- 移動可能な機械類は浸水しないように安全な場所に移す。また、加温機は倒伏しないように固定するとともに煙突を片づける。
- オイルタンクの元栓は閉めて、本体が倒伏しないように十分固定する。
- 陽熱消毒中のパイプハウスは被覆ビニルを剥ぎ、地表面の被覆ビニルは飛ばされないように固定するか、台風の状況によっては除去する。また、うね立て後のべた掛けビニルも同様に対応する。
- 育苗床のかん水チューブの破損等が予想される場合は、取り外して片付けておく。
- ポット苗は、コンテナに入れて安全な場所に移動するか、寒冷紗等で被覆し四方を押さえる。
- 棚育苗床では架台を補強する。また、株の損傷を少なくするため架台全体を、寒冷紗等で囲み固定する。

【 事後対策 】

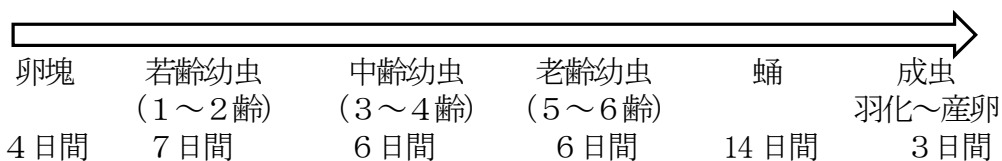
- 浸・冠水したほ場は速やかに排水する。
- 子苗を被覆していた寒冷紗等は、台風通過後、速やかに除去する。
- 茎葉に付着した泥等を真水で洗い落とし、殺菌剤を散布する。
- 潮風で作物に付着した塩分は、十分量の真水で洗い流す。
- 停電が長時間が及ぶ場合には、自家株冷中の苗は苗傷みをさけるため、冷蔵庫外に出して広げる。

トピックス ハスモンヨトウの多発に注意しましょう

例年、イチゴでは、育苗期後半からハスモンヨトウが寄生し、9～10月に発生のピークとなります。令和2年には、育苗期後半にハスモンヨトウの発生が多く、本田で多発しました。

ハスモンヨトウは、春から降雨が少なく、夏季が高温の年の秋口に多発する傾向があります。本年の6～7月は、平年より高温で、降雨が少なく（図1、2）、8月もこの傾向が続くと見込まれています。ハスモンヨトウの発生に注意し、育苗期に発生が多い場合には本田での発生を抑えるよう防除対策を講じることが必要です。

1 ハスモンヨトウの各生育ステージごとの日数（25℃）



2 防除上の注意点

- ほ場内や周辺の雑草はハスモンヨトウの増殖の場となるので除草を徹底する。
- 若齢幼虫が群生している葉（かすり状に食害された葉）を見つけ次第、除去してほ場外に持ち出す。
- 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫（卵がかえって7日間程度、体長 1.5cm くらいまで）のうちに防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、同じ系統の殺虫剤の連用を避ける。

3 かん注剤の利用

- 育苗期後半にハスモンヨトウが見られる場合には、残効が長い薬剤を育苗期後半～定植時にかん注することで、定植後の発生を抑えることができる。

かん注薬剤

ベリマークSC

| 希釈倍数 | 使用方法 | 使用時期 | 使用回数 | 散布液量 |
|---------|------|------------|------|--------|
| 1,000 倍 | かん注 | 育苗期後半～定植当日 | 1回 | 50mL/株 |

本剤を育苗期後半～定植日当日にかん注しても、本田におけるミツバチ、チリカブリダニ及びミヤコカブリダニの活動には影響を及ぼさない。

使用上の注意点：アルカリ性の肥料との混用を避ける。

本剤はジアミド系殺虫剤であり同系統の薬剤（プレバソンフロアブル5、フェニックス顆粒水和剤、ベネビアOD）との連用に注意する。

本資料中の農薬に関する記述については、令和3年8月1日現在の登録内容に基づいている。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！